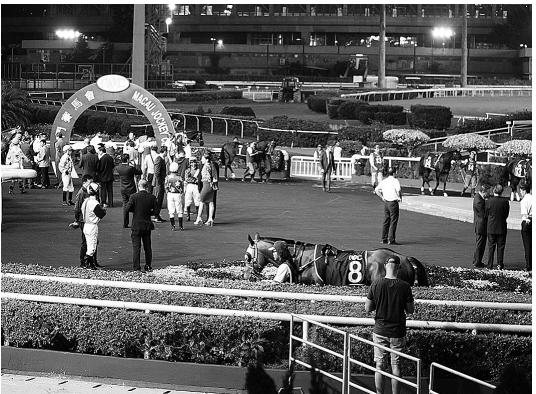
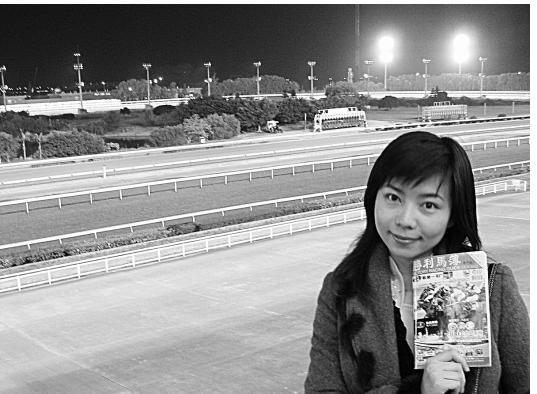




ありし日のコールダー競馬場スタンド



17年撮影のタイパ競馬場・パドック風景



タイパ競馬場のコースをバックに 勝利馬簿を持つ05年の小島友実さん

世界旅打ち気分

●第53回・第一歩の競馬場

須田鷹雄

ヨロナの影響もあり在籍馬の数もかなり減っているようで、近い将来存続問題が出てくるかもしれません。い。既にマカオのドッグレース場はなくなりてしまったが、競馬場には少しでも踏ん張つてほしいところである。

アジア以外で筆者が最初に行った競馬場はどこか。初めてだけは覚えていそうなものだが、意外とそうでもない。ヨーロッパはネイフが勝った2002年のインター・ナショナルS=ヨーク競馬場ではないかと思うのだが定かでない。しかもこの時に写真を撮っていた(当時はまだデジカメが発達していなかった)ので、そのうち再訪しなければならない。

アメリカは、おそらくサンタアタ競馬場だと思う。昔は2月末にフロリダでファシングティップトン社、3月はじめにカリリフォルニアでバレツ社の2歳セールを取材するのが恒例で、隣接する競馬場に行っていた。当時ファシングティップトン社のセールはコールダー(カルダー)競馬場で行われていたので、東海岸で最初に行った競馬場はガルフ

サンタアーダもガルフストリームも既に本連載では扱ったので、今回は廃止場であるが「オールダーレース」に触れておきたい。開催日には1回しか行つたことがなくセリの思い出のほうが多い。世界最高額の1600万ドルでザグリノモンキーが取引された06年のセールも現場で見た。

開催日の競馬場としては、よくも悪くもシングルだなという印象だった。ガラス張りのスタンドは見た目に特徴があつたが、大改装したガルフストリームに比べるとやや古さが目立つた。なか特徴があるというよりは良くも悪くもシングルな競馬場だった。

「」にはスタンドの写真を示したが、これはカジノが併設されたあとで、そのためスタンドには「オールダーカジノ」と書かれている。

つい先日までフロリダ州には「カジノをやるために競馬、ドッグレース、ハイアライ（賭けを伴う球技）などのバリミュチ（アル賭事業を運営していくことはならぬい）」という法律があり、末期の「オールダーレース」はカジノの本籍地としての意味しか与えられていなかつたようだ。そして「競馬はガルフ

はじめて海外競馬に行つてから約30年、訪問した競馬場は180場を越えた。その第一歩は香港の沙田競馬場……だと思っていたのだが、冷静に考えるとその前日に行つたマカオのタイプ競馬場のほうが先だった。

ホクセイシプレーが出走した香港国際ポウル(93年4月)を取材に行つたのでつい香港の印象が強くなつたのだが、その前日にはマカオのリスボアホテルに泊まつてカジノだけでなく競馬場にも繰り出していた。おまけで行つたとはいえ、そちらが第一歩だ。

そのタイプ競馬場だが、カジノが外資に開放されてマカオが一大カジノ都市になるとともに、存在感が薄くなつていった。私がはじめて行つた93年の時点で既にさびれた雰囲気はあつたが、今までは風前の灯レベルである。

もともとマカオは競馬にとって経営が容易ではなかつた。最初にタイプの競馬場が作られた時点では、ハーネス(繫駕速歩競走)の競馬場で、たしか台湾資本が経営していたはずだ(その時代には訪問していない)。その経営が行き詰つたところで引き受けたの

がカジノ王として有名なスタンレー・ホー。そのタイミングで平地競走の競馬場に変わった。

筆者が行くようになった90年代後半の雰囲気を記してみたい。

タクシーなどで乗りつけると、入場券売り場の前で子供が専門紙を売っていたものだ。いまでは来場者が少なく商売にならないので、現場に売り子はない。専門紙も昔は複数あったはずだが、勝利馬簿というブックタイプのものがからうじて存続しているだけである。手元の写真を探したら、本会報でもおなじみ小島友実さんとタイバ競馬場に行つたときの写真があったので掲載してみた。ゴジマさんが持つているのが勝利馬簿である。

売り場で当時5パタカ(パタカは香港ドルとほぼ等価)だった入场券を買い、その頃は持ち込み禁止だった携帯電話を小さいロッカーリーに預ける。エスカレーターで3階まで上がると、2階より若干料金の高い来場者が馬券を買っている。この3階にはレストラン・スカイハイという中華料理レストランがあつて、店内にも馬券売り場が設置されていた。2階は2階で売

ストリームに一本化したほうがいいよね、『コーラダー』はカジノのためにはハイアライやるほうが低コストだよ」といふことになり、競馬を廢止して「渋々やるハイアライ」が始まった。この「コーラダーハイアライ」も一度くらいは見たかったのだが、「口ナド行きそびれている間にもう無理にパリミコナル種やらなくていいです」と法律が変わり、その瞬間廃止になつた。同じタイミングで他のハイアライ場や、ハーネスレース場のポンパノパークル協議側の人間としては「結局カジノが全てかよ……」と寂しい思いがする。

店があり、焼きそばなど4～5種類の選択肢から選んで食事をとることができた。

いまでは3階がクローズされてしまい、2階の売店もかろうじて存在する程度。馬主がいる関係者スタンドはかろうじて「生きてる」という感じがあるのだが、一般ファンのスタンドは寂れに寂れでいる。なまじ大きなスタンドだけに廃墟感も出てしまっている。

いまは入場無料なので入場券売り場も閉まったままなのだが、そういうた遺構ができてしまっているのも、マニアにとってはよいが現設施としてはあまりよくない」となのかもしれない。

マカオでは一時期「中国旅行団ブーム」というものがあり、内地からの団体ツアーカー客が競馬場やドッグレース場を賑わせていた。あの頃が見た目の繁栄としては最後の良い時期だったかもしれない。ただ内地からの団体ツアーカー客というのはあまりリッチではなかつたらしく、競馬場でもドッグレース場でもあまり売り上げにはならなかつた。その間に地元客もカジノに流れる一方で、競馬場はピチの日々が続いている。最近では